

たいのであります、此れより出發しない淨行は空行でありそして寧ろ罪惡なんでムいます。』大亮の聲は益々活氣を帯びて來た。

『どうしても御前は先師の流れを吸ひ事が出来ないのか否先師の言を一個の反古として省り見ないのか。』大勤は前身を微動させ乍ら言つた夫は彼が毎時も意氣まく時には怎した態度を取るのが常習だつた。

『御前はなせ共に氣を合して行く事が出来ないんじや。ア、仕方が無いお前と俺とは互に異つた二つの道を歩まなければならぬのじや。』歎息の調子だつた。

『そうでムいます。』と大亮はつゝけた私は私としての道を歩みどうムいます私の淨行を行じどうムいます。たとへ道は互に異つた二つの道を歩みますとも而し私の血は御師範の血管に通つて居ると云ふ事をお忘れ下さら無いやうに御願ひ致します。』

と大亮の語句が言ひも終らぬや、大勤は爐の傍に忽倒した。大亮はをごろいたやにはに彼は大勤の手を取つたがもう已に氷の如く冷たく成つて脈は何んの手ごたへも無かつた。死のブラックベールは大勤の面を覆ふて血の氣もなかつた。而し大亮の體には生氣くした動脈が依然として淨く流れて居た。

時は已に三更を過ぎて夜泣きウドンの氣味悪い笛は遠くかなたに眞夜の寂寞を通じて聞へるのであつた。



創作  
轉  
變

下  
田  
冷  
涙

それは文永元年十一月十一日の遅い午後であつた。

晩秋の物淋しい霧が其の邊一帶の松原に低く垂れ罩めて太平洋の彼方から海面を這つて來る風は、松の葉末を頻りに搖り動かしてゐた、丁度其の時。

霧の中に降つて湧いたやうに現れた百人餘りの兵者があつた。

『如何に強情我慢の日蓮も、今日ばかりは袋の中の鼠も同然、各々方は伴の奴原を遠矢にかけて射止められよ、當の日蓮は某し一人にて打ち果し申す、ナニ高の知れたる僧俗共!!』太く逞しき駒にうち跨り斯く叫んだのは、云わずと知れた東條左工門影信であつた。

彼は近郷切つて並ぶ者なき權者として鎌倉の極樂寺家から、特別の恩寵を受けてゐる傲慢な、自負心の強い惡地頭で而も念佛に飯依してゐた。

日蓮大上人に去る建長五年四月廿八日、清澄寺で初轉法輪の際、彼の歸依する念佛を破折され自負心を踏み躪られた彼は『おのれ憎つくき日蓮、眞ツ二に致して呉れん』と、意氣卷いた事があつた。既に其時から怨みを持ち、其の上清澄山の領地争ひの節も名越方の味方になり、彼を不利の地にたゝしめ、彼の惡計を覆えし傲慢の鼻柱をへし折られた争もあつた。無念に無念を呑んで折もあらば此の怨みを——と思つてゐた處に、此の度び上人が慈母の病氣見舞に房州に歸られたと云ふことは、影信に取つては勿快の幸ひであつた、而も上人が一月も二月も影信の存在を全然認めぬが如く振舞われた——(上人は只慈母の見舞かたがた、別に何の意味もなく法を説いてゐられたのであつたが——)のが彼の怒を増す大きな原因のひとつでもあつた。

此の日は大上人が近郷なる天津の城主工藤左近之尉吉隆に請われて、彼の館に趣むかれる日であつた。此のこゝを知つた影信は、好期逸すべからずと腹臣の者を叫合し、扱は上人を要撃せんと小松原へ乗込んで來たのであつた。

かゝる陰謀が途中に企てあらうなどと云ふことを夢露存じ給はぬ大上人の一行は午の刻(今の十二時)に花房を發足つて御伴には、日朗、日澄、鏡忍、乘觀、其他歸依の男女十餘人と共に、高聲に御題目を唱へつゝ、此の小松原へこ差し掛られたのであつた。

木末を渡る松風に送られて来る題目の聲を、遙か彼方に聞いた影信の一味は、互ひに云ひ合わせたやうに目配をして無言のまゝ、彼方此方の松影に身を潜め、固唾を呑んで待ち伏せた。

聽て大上人の一行を、矢頭に遣過した彼等は。

『ソレツ』と、ばかりに打つて出た小松原の只真中——射る矢は霰、劍は稻妻——、此の態を打ち眺めた時鏡忍坊の眉毛は、ビリ、ツと動いた、彼は大上人の門下の中でも十人力の強の者として誰知らぬ者もなかつたくらい力の持主であつた。

『お師匠様!! 一大事で御座りまする、此の場は鏡忍命の續く限り喰い止めますれば片時も早く天津の方へ——』と、云ひも終らず兩方の衣の袖を肩の所にしつかりと結び、手近にあつた松をメリ、と引き抜き、

『おのれ佛敵。』  
と、無二無三に暴れ込み、當るを幸ひ左右に撻き伏す、左藤次、長英も、これに勵まされ同く抜き連れて斬り込んだが、多勢に無勢の悲しさには三人共亂軍の中に題目を唱へ乍ら落命した。

折しも、亂軍の中から馬を煽つて大上人の側に乗り寄せた影信は、

『ヤー積る怨みの賣僧日蓮——其處動くなッ。』

と、馬上から振り翳した三尺餘りの得物、日蓮大上人は、

『慮外者ッ退り居れッ。』と、云ふより早く念珠の親玉を以つて、發止と受け給へば、梅の木の親玉は真中から切り割られ、勢ひ餘つて大上人の御額に二三寸、三ヶ月形に斬り付けた。

『仕損じたり。』と、影信は二度目の太刀を振り下ろそおとした時、彼の刃は鏝元からばつきと折れた。

『ヤ、ッ。』と、影信あつけに取られてゐる間に大上人の姿はまう其處には見へなかつた。

『御注進——』

『御注進で御座りまする。』と、氣魂ましく叫び乍ら吉隆の館に駆け込んだ一人の若者があつた。

『大上人様の御身の上一大事で御座りまする。』

『ナニ大上人の御身の上一大事とは——。』

吉隆の顔色はサッと變つた。

『アノ影信奴に御座りまする、只今大上人様の御一行小松原へ差し掛り給ふ折柄、彼の法敵の兼ねて期したる……み味方の腹臣、小手腹巻に身を固め前後に伏せたる百餘人……。』

『エ、ッ。』

『して大上人に如何なされた——。』

『お命の程も覺束なふ御座りますれば寸時も早く御助勢の程を——。』

『扱ては憎ツくき影信めが——。』

『彌總次——。』

『ハ、ッ。』

『馬の用意を致せッ。』

隆は俊馬に打ち跨り一と鞭あて、

『者共續けッ。』と、小松原差して眞一文字に駆け出した。

晩秋の短かい日足は、早西の山の端に没して時に急ぐ鳥が二ツ三ツ、渚にそおて翔けて行つた。

押寄せては倒るゝ灰色の波の音は吉隆に、悲報を傳へるものゝ如くに聞こえた。

吉隆が走せつけた時は入り亂れて戦つてゐる眞最中であつた。

『ヤー正法に双向ふ邪宗の奴原、此の吉隆が馬蹄にかけて片ツ端から蹴散らし呉れん。』と、群がる敵の中へ面も振らずに斬り込んだ、一心籠つたる切つ先は見るゝ内に十人餘りを斬り倒した。

これを見た影信は、

『それ吉隆なるぞ由斷すな、日蓮が身替りに遠矢にかけて射殺せよ。』と、下知をなしつつ、自分はそれにかま

わず、大上人を血眼になつて探してゐる。

『大上人様、大上人様には何れにおわすや、工藤吉隆お迎ひにまいりましたる上は、二百に足らぬ狼籍共何に程の事や御座りませう。』と、

彼は戦い乍らも大上人の安否を氣遣つて叫んだのであつた、折しも四五丁先の松影に一人の出家——。

『あれなるは慥かに日蓮。』と馬を翻つて馳け出さんとするより、これを眺めた吉隆は、

『推參ッ。』と、ばかりさつと彼の面前に馬を乗り出し必死となつて斬りつけた、影信は烈火の如く憤ぞおり。『邪魔だて致して後悔すな。』と、これも同じく斬りかかる、兩人は馬乗り廻し秘術を盡して丁々發止と火花を散らして斬り結すび、十二三合も戦ふ内、影信は次第に切り立てられ、後へくど退つてゆく、折しも何れより飛び來たつたか征矢一本、吉隆の庫腹のあたりにグッサと立つた、さしにも強氣の吉隆も、

『ウム。』と、云つたまゝ鞍の上に腑向きになる、得たりと影信近か寄らんとする間一髪、北浦忠吾、忠内の兄弟は、主人の大事と見てとるより、影信の左右から必死となつて斯りかゝつた。

其の間に他の家臣は吉隆の馬を附近の松原に引き入れた、影信は齒嚙をなして残念がつたが、早其時は夜の戸張はあたりに迫つて人顔さえさだかにわからなかつた。

『大上人様には如何なされた。』忠吾、忠内に前後から看護され乍らこゝ訊ねた吉隆の顔色は、土よりも青かつた。

『只今一同の者お探し申して居ますれば、おつつけお見へに成りまする、お氣を確かに……。』

『ウム、痛む吾が身は厭わねど——大上人のお身の上が……。』

『して狼籍者は……。如何致した。』

『皆引き擧げまして御座ります。』

彼は苦しさに堪へぬものゝ如く目をつむつたまゝ、

『ウム。』と、輕るく返事をした。

其の時松の枯葉に付けられた火は、一時にはつと四方りを明るくした、吉隆を見守つてゐた一同の面てには表現し難い、憤怒と、悲痛の、色があり／＼と見られた。

『お、吉隆殿!!』こう叫んだ大上人は思はず吉隆の手を、しつつかと握られた。

『お、大上人様か?!』彼は兩眼をくわつと見開いた、一同の者は思わず襟を正して顔を見合せた、そおして彼等の内には人知れず涙を拭いてゐる者もあつた。

『傷は淺そお御座るぞ、お、氣を確かに持たれよ。』

『あゝ有難う御座ります。』彼は大上人の顔をきつと眺め乍ら、

『して貴方様の其のお傷は——。』

『なにこれしきばかりの掠り傷——。』

『それにて安堵致しました。』彼の眼は段ん／＼暗くなつて行つた。

『したが此の吉隆、かゝる深手にては——。』首節から胸の方へ通つてゐる、大きな血管が時々、ビクリ／＼と波うつてゐるのが焚火の明りで微かに見られた。

『大上人様、吉隆最後の御願ひ……ご申は、ほ、ほかでも御座りませぬ、只今愚妻は懐胎の身の上、も若しも男の兒で御座りましたら……何卒御弟子に——。』

『何と云われる、たつた一人の男の兒でも——。』

『く、工藤の家と法華經とを替えられますれば、某しの本望——。』

『お、天晴見上た吉隆殿、日蓮身に替えて育み申す。』

吉隆はゴツクリ唾を呑み込み乍ら、大上人様おゝさらばでござりまする、南無妙法蓮華經……。』

『國の爲法華經の爲、まつた日蓮が身替りとなつて……』こゝまで云つて大上人は感極つて衣の袖に面てを覆つてしまわれたのであつた。

『果、果報者じやと云つて下さりませい、南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……。』

「御身の殉死なされる法華經は、三途の川にては船となり——冥途にては燈火となり、靈山へ參る橋で御座るぞ、梵天帝釋、四大天王、閻魔法王の御前にも、日本第一の法華經の行者日蓮が弟子檀那と名乗つて通られよ。」

「あ、有難う御座りまする——。」

二三度、微な聲で題目を唱へ終つた時、吉隆の頸はガツクリ、と前にうな垂れた。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……』一同に唱ふる、嚴肅な、靜かな題目の聲は靜かな夜の松原の奥深く泌み渡つて行つた。

數日の後、館の後ろの丘に大きな新しい土饅頭が出来て數十本の長い旗が、麗かな朝風に翻がへつてゐた。そおして其處には、二人の出家が靜かに讀經してゐた、それは日蓮大上人と、弟子の日朗とであつた。



## 不幸なる哲人の物語

高崎 一一一

春の野邊に可憐な花がにつこり笑ひ小さな鳥や蟲などはたのしげに戀のうま酒を汲みかはしてゐました。野の向ふに大きな森こんもりしげつてゐて森の傍には始終暗い影の漂つてゐる廣場がありました。そこに入る者は何となく氣が滅入りました。例令其人がどんな金持にしろ乞食にしろ軍人にしろ政治家にしろ道覺者にしろ宗教家にしろ詩人にしろ皆同じでした。